

# 植民地朝鮮の博覧会事業と京城の空間形成

朴 美貞

## はじめに

19世紀の半ばに始まり今日まで続いている博覧会は、そのテーマや規模、時間と空間を異にする多様で重層的なテキストである。欧米で始まった博覧会は、人類の発展を標榜しながら、一方で植民地領有を記念し、植民地主義を支えるイベントとして用いられたことが一般的に知られている。日本は、欧米で開かれる万国博覧会などに自らも出品するかたわらそれらの博覧会事業をいち早く学習し、富国強兵・殖産復興をスローガンとして自国内でも展開してきた。そして、アジアの植民地獲得と領有を続けていく中で、それらの植民地博覧会というテキスト<sup>1)</sup>を有効に活用したのである。とりわけ1906年に統監部が設置されてから1945年まで日本の植民地下におかれていた朝鮮では、共進会や品評会と名付けられた博覧会イベントが多数行われていた。

朝鮮で開かれた博覧会に関しては、朝鮮物産共進会(1915)と朝鮮博覧会(1929)に注目した先行研究がある<sup>2)</sup>。先行研究は、2つの博覧会における次の共通点に着目している。第一に、朝鮮総督府による主催、植民地の中枢都市である京城で旧朝鮮王宮を開催地としたこと、第二に、植民地施政を記念する行事の一環として最も規模が大きいイベントだったことである。こうした先行研究は、パビリオンの構成や展示内容、文明的・経済的格差を顕著に表す展示の仕組みなどを読み解くことで日本式オリエンタリズムがこれら2つの博覧会に介入していたことに注目している<sup>3)</sup>。一方、植民地近代性(colonial modernity)論に関する近年の韓国側研究者らによる研究<sup>4)</sup>は、これまでの植民地博覧会研究にも重要な示唆を与えている。しかし、朝鮮で行われた博覧会事業の全貌を明らかにする作業やその詳細に関する実証的検証は未だ手薄であると感じざるを得ない。

そこで、本稿では、植民地朝鮮における博覧会事業を居留地の形成と居留民商工会議人の活動を中心に考察していく。また、博覧会事業の変遷をたどることで、それらが朝鮮の都市化・産業化・モダニティ化に及ぼした博覧会事業の内実を問い直していく。とりわけ本稿では博覧会事業と植民地都市の空間形成との相互関連性に注目し、1929年に朝鮮博覧会の開催に至るまでの京城における空間の改造や誘導、その思想背景と結び付けて分析を試みる。

## 1. 居留地の形成と博覧会の始まり

### 朝鮮初の日韓博覧会

朝鮮で初めて開かれた博覧会は、1906年の4月25日～7月25日の約3ヶ月間、釜山で開かれた日韓博覧会である。1906年は日本が日露戦争に勝利した後朝鮮に統監部が設置され、朝鮮

が日本の「保護下」に置かれた年である。統監部の役員と旧韓国政府の大臣らによって推進された当博覧会は、「日韓貿易の発達に資する為」に開催されたものだった。会場は釜山商工会議所構内とし、300あまりの出品者数と400点あまりの物品が展示された<sup>5)</sup>。展示物は日本からの工産品と朝鮮各地の特産品が主流をなしていたが、中にはビール、農機具、セメント、マッチなどの当時の朝鮮ではものめずらしいものも含まれていた。この博覧会に足を運んだ観覧客の数は77,000人ほどで、当時の釜山人口の2倍に当る数字であった。展示規模や展示品の内容、観覧客数などから当時の朝鮮では大規模の近代的なイベントであり、釜山商工会議所の歴史上特筆すべき事跡でもあった<sup>6)</sup>。

当博覧会で注目すべきところは、初の博覧会事業が首都の漢城ではなく釜山で開かれた点である。統監部設置後の釜山は内鮮連絡の要衝であり欧亜の関門として重要な位置におかれていた。同地は地理的に日本と一番近く、「倭館」などの外交施設を備えていて昔から日本との物流や貿易の拠点であった。当地で初の博覧会事業が可能であったのは、1876年（高宗13年）2月に「日朝修好条規」<sup>7)</sup>が締結され、最初の開港地として早くから釜山に日本人居留民社会が形成されていたことが最も大きな理由だった。つまり居留地商業界の繁忙とともに釜山では「経済団体」が結成され、博覧会開催に際してそのネットワークを有効的に活用できたからである。たとえば、1879年には「両国貿易に関する一切の利害得失を商儀し又貿易上官庁の下門に答へ及意見を官庁に建議し兼て物品陳列所を管理す」という目的で「港会議所」が作られた<sup>8)</sup>。そして1882年には、日本人居留民たちによって輸移出入貿易を取り締まる釜山港商業会議所が設立され、以後釜山の商工業改善発達の主体となった。当会議所は、商慣習の改善、通常貿易の助長、海陸交通の整備、商業教育、消防整備、貨幣の整理、倉庫の設備、郵電通信の膨張、農事の改良にいたるまで産業貿易のみならず、その他の事業に関しても検討し実施してきた。さらに注目すべきことは、日清・日露両役の際には、官憲のみならず居留民一般も協力し官民一致の力で戦勝に貢献したことである。このような居留民の中では、貿易商を開始し財産を築き上げては朝鮮各地のさまざまな事業にも手を広げ大富豪になった人もいる。その一人迫間房太郎は、1880年に渡港し、貿易で富を築き、さらに釜山水産、釜山倉庫、釜山瓦斯電気釜山林棧橋会社、亀浦銀行、慶南銀行、釜山商業銀行、釜山貯蓄銀行、朝鮮製錬会社等々の、それらいずれにも創立委員発起人となり、社長取締役もしくは監査役として産業や経済をはじめ多方面に事業を広げ巨富を築いていた。さらに公職としても釜山居留民会議員、釜山府協議会会員、慶尚南道評議員等々の座に就き、植民地朝鮮で有力人士として活躍していた。

日韓博覧会の開催は、まさに以上のような朝鮮輸出貿易の要であった米穀貿易商の迫間房太郎、大池忠助、井谷義三郎、浅谷長輔、等々の釜山日本人居留民社会の有力人士たちに、他の居留地の日本人有力商工会議人や、地元の朝鮮人商工会議人がそれぞれ協力したことによって可能であった。なかでも当日韓博覧会が成功に幕を閉じるのに「協賛会」の組織設立も一躍かっていた。当日韓博覧会開催と同時に、博覧会の「盛況を鼓吹すると共に来観者の間に介在して諸般の付帯事業を経営し以て後援者となり案内者となり此博覧会の成功を大多ならしむるにあり」とその設立目的を地元の人々に謳っていた<sup>9)</sup>。そのような点で、朝鮮で開かれるさまざまな博覧会事業の中で博覧会運営の実際の担い手となるこの協賛会の存在は注目に値するといえる<sup>10)</sup>。

ところで、開港当初から貿易・商業に関するシステムは全体的には日本人居留民に非常に有

利な販売システムが適用されていた。たとえば1876年の日韓修好条規の内容には、居留地の日本人に「治外法権」が適用され、さらに同年8月に結んだ「修好条規ニ付属スル往復文書」と「修好条規付録」には、「輸出入品に関税をかけないこと」「日本貨幣の通用を認めること」などが記されていた。これらはいずれも日本人商工人にとって非常に有利な取り決めであった。日韓修好条規に基づいて79年8月には元山が開港され、その翌年5月には元山に日本領事館が設けられた。引き続き、83年2月に仁川に日本租界が設けられ、9月には開港される。同年11月には、朝英修好条約・通商章程が締結されてからは朝鮮の首都漢城に日本人が居留するようになった。そして居留民の数は、最初の移住時である76年末の54人に過ぎなかった在朝日本人が84年末には、4356人まで急増した<sup>11)</sup>。引き続き、1897年には木浦と鎮南浦、98年には馬山、平壤が開港される。98年に群山で各国租界地が設定され、99年には開港された。しかし、これらの各居留地（各国共同租界）の居留者は民族出自別でみると90%以上を日本人が占めていた。そして開港当時の日本人移住者たちの職業をみると、1880年末の釜山の日本居留民の職業を調査した統計から多い順は次の通りである。仲買152戸が圧倒的で、諸工43、貿易商・小売雑貨商各34、料理屋15、飲食店13、意味不明11、仲買兼小売人8、貿易兼仲買5、小売雑貨兼貿易・質屋各4、仲買兼貿易・船舶屋・小売雑貨兼仲買・飲食店兼仲買各3、船問屋兼貿易・小売兼貿易・国立銀行各2、廻船会社・質屋兼仲買・旅籠屋兼仲買・仲買兼雑業・小売兼雑業・旅館兼飲食店各1、計347戸で、その内仲買（小売人・貿易など）を専業とする人が全体の44%を占めていたとされる<sup>12)</sup>。このような傾向は、開港当初仁川、元山、木浦、群山、鎮南浦、馬山、平壤などの他の居留地にも似たような割合であった。居留民たちは日本から輸入したマッチ、ランプ、石油、カンテラ、金巾、紡績糸、巻タバコ、菓子などの日用工産品を朝鮮人向けに売買し、沙金、牛骨、紅参などの朝鮮の特産品や米などの穀物を朝鮮で購入しては、日本をはじめ諸外国に輸出し利益を得ていた<sup>13)</sup>。日本からの輸入品と朝鮮各地の特産品が日韓博覧会の展示出品目の主流をなしていたのは、一方では朝鮮居住日本人商工人たちの販売で取り扱う物品を朝鮮人により広く知らしめるための宣伝・広報のため、他方では朝鮮で生産される米を始めとする穀物や特産品の販売ルートを開拓し、経済的利益の創出をもくろむためだった。

一方、開港後の各日本人居留地では道路・交通網が建設され産業政策が施行されていった。そうしたなかで経済活動の繁盛と便宜を図るために作られた商工会議所などの経済団体による全国ネットワークとそれらの商工会議所の有力会員とによって朝鮮における博覧会事業が展開された事実は注目するべきだろう。商工会議所の有力会員の中には、居留地で貿易商に関わり富を築いた後、不動産業、高利貸などでさらに財産を増やしては、朝鮮全国を範囲とするさまざまな事業に手を広げ富豪になっていた人もいた。さらに、彼らは後の朝鮮総督府が施行する産業・殖産復興政策などにも積極的に関わり、居留民社会や商業会議団体の中心的な存在として居留地の都市化や産業化、近代化に尽力する。なにより彼らのうちには朝鮮の伝統復興産業の企業化の取締役に就き、その製作品と朝鮮の特産品などを展示・広報・販売といった消費の近代的システムを生み出す博覧会事業の中心的役割を担う存在となる。

### 殖産復興政策と博覧会事業の展開

1910年の日韓併合と同時に総督府が設置されると初代総督寺内正毅による官制改正と行政施

設の改編が行われた。その中、改正は「(三) 度支部所属の醸造試験所及び農商工部所属の試験分析鑑定事務を新設せる中央試験所に移して工業伝習所を之に付置し。……(四) 農商工部の殖産商工二局を農林殖産二局に改めて農務山林水産商工鉅務の五課に分ち」は、朝鮮の伝統産業復興に係る改正であった<sup>14)</sup>。(三)で取り上げている工業伝習所は、統監府設置(1906年)後の1907年に設置され、教育と研究・調査が中心であった。朝鮮の陶磁器・製紙・螺鈿漆器及び漆・醸造業の分野が中心的な調査研究の対象であった。専攻には、陶器・染織・木工・金工・応用科学・土木などの六つの科が開設された。中、土木科は教育要件の問題で1910年に廃科されたことに対し、染織・窯業・応用科学という三つの3年課程の特別科が1915年に新設された。その教職員は日本から招聘された人々で構成された<sup>15)</sup>。総督府は、工業伝習所や有望な企業に対して助成したり、技術員を派遣し指導させたりすることによって在来工芸の生産力を増進させようとしていた。

一方、(四)の改正は、朝鮮在来官制での農業を殖産局に、商工を商工局としておいたのを、農務と山林を農林局として、商工は、水産、鉅務を加えて殖産局に改めたものである。商工を殖産に改めたことは、商工業の未だ振興せざる朝鮮の状況下の殖産復興のためであり、具体的には、工業の復興、技術人力の養成、生産力の増進を計るため、朝鮮各地の名産として定評あるものやその有望なる起業に補助を与えて極力奨励するという方針をとった。例えば、統營の〈螺鈿細工〉、陝川、淳昌の〈製紙〉、端川、海南、海州の〈石細工〉、沃溝の〈莞蓆〉、始興の〈柳行李〉、羅州の〈竹細工〉、尚州の〈絹織物〉、明川の〈麻布〉、寧越、米院の〈葉煙草〉、平壤の〈磁器〉等である。なかでも、総督府が力を注いだのは、統營の螺鈿細工と漆器を含め、陶磁器類であった。当時の朝鮮の陶磁器類に関しては日本人の関心が高く、統監府設置後には本格的な起業活動が行われ、青磁の再現と生産に重点が置かれると同時に朝鮮各地の在来窯業の復旧も奨励された。勿論、企業の取締役には日本人が多く、在来工房においても日本人の制作や販売への介入によって、次第に日本式の運営へとかわっていた。

その代表的な人物の一人として富田儀作(1858-1930)をあげられる。富田儀作の場合、始めは大阪の小西和商店の支配人として台湾に渡り、基隆、臺北などで勤務していたが、その後小西和商店の京城支店長として京城に渡った。その後北朝鮮の殷栗、長連の採掘事業(殷栗鉦山経営)に手をつけ、それから次々に事業を広げていった。土地を買収し蔬菜の栽培、林檎の栽培、山林の育成、富田農場などの産業開発だけではなく、朝鮮の伝統工芸品の復興にも関心が高く居留地の鎮南浦で「三和高麗焼製作所」を設け、朝鮮の伝統工芸高麗焼の復興に専念した。その製作所が鎮南浦だけではなく、京城にも「漢城高麗焼」の支店を設け、販売の企業化を計ったのである<sup>16)</sup>。鎮南浦と平壤に設立した陶磁器合資会社である「富田工業」を始め、咸鏡南道泰川の螺鈿漆器制作施設である「泰川漆工芸所」をも設ける。後には、朝鮮王室御用の工芸製作機関である「李王職美術品製作所」を買収し、1921年になると富田は「株式会社朝鮮美術品製作所」の取締役に就く<sup>17)</sup>。この朝鮮美術品製作所とともに南大門パミリ(巴密里)ホテルに「朝鮮美術工芸品陳列館」を開館し、販売にも力を注いだ。4,000点を越える陳列品には、青磁、白磁、などの陶磁器類の発掘品を始め、漆器などの骨董品も含まれていたが、その主な販売品は美術品製作所のものであった。販売用の小物手工芸装飾品と工芸品の日本式技能と様式が目立つようになり、復古的傾向ともいえる名高い歴史遺物の形態を借用し、縮小、変形を行っていた。



後には、メダルや記念品なども多数注文制作された。富田の平壤磁器会社、鎮南浦の三和高麗焼、咸鏡北道寧越の寧越高麗焼、ソウルの漢城高麗焼などは青磁の伝統技術の再現と生産力増進に力を注いでいたが、それが成功し、それらの工芸品が皇室、宮家、宮内省の買い上げとなる。これらの朝鮮伝統工芸品は、後の各品評会、共進会などの博覧会会場で展示・陣列され、好評をえる。たとえば、大正2年（1913）の秋に平安南北道・黄海道の三道合同の博覧会が鎮南浦で開かれた祭には、府尹は主宰兼会長となり、富田儀作は理事長として尽力した。1915年の施政5年記念朝鮮物産共進会では、各種農産物、鉱産物など自ら経営している企業の各種多数の生産品を出品する。その内訳は、会場内には大嘗祭の新穀献納者として献穀耕作他の模型並びに富田農場の模型などを第一号館農業部に、三和高麗焼などを第一館工業部に出品した。富田は当博覧会に官民有志とともに協力し、その功勞により出品人総代に選定せられ、祝辞を朗読する。これを前後に数次博覧会イベントで出品人総代の役を任される。注目すべきことは、この施政5年記念イベントに出品物の優劣や出品者の功勞を評価し受賞制度を設けていたため、富田は博覧会事業の功勞者として功勞賞を授けられた。出品物に対しても農業において名誉金牌一、工業において金牌一、鉱工漁業などでは銅牌五、同賞状六を得た。富田はほかにも三和銀行の創設や様々な商工人団体の頭に就き精力的に商業活動を行った。さらに、鎮南浦の商工会議所頭の職にあった富田は、神社、病院などの改築を施し、鎮南浦の発展にも力を注いだ。富田のように日本人有力商工人の中には朝鮮総督府の殖産復興政策の後押しを契機に朝鮮の伝統産業の復興と企業化だけではなく、さまざまな産業にも直接携わることによって次第に朝鮮経済の主導権を握る存在となった。その最中で各居留地は次第に都市化が進められ、それらの地域で特産品の品評会や共進会等々の博覧会事業が展開されたのである。

ところで、統監府設置の1906年から45年までの間朝鮮で開かれた博覧会事業の概略を整理すると次のとおりである。1906年統監部設置から1910年の併合までの間には、主要な博覧会イベントは釜山、京城、平壤などの日本人居留地を中心に開かれた。この時期は日本の工産品と朝鮮の農・水・特産品が陳列品の主流をなしていた。その一方で1910年の併合後には、京城を中心に釜山、鎮南浦、木浦、群山、大丘などの各居留地に並んで交互に行われるようになった。そして、そこでは日本人による輸入品と開催地の特産品が陳列品の主流となっていたのである<sup>18)</sup>。つづいて主催者で分けると次のようになる。朝鮮総督府主催のいわゆる「官」主導の行事は、1915年の施政5年記念朝鮮物産共進会と1929年の施政20周年記念朝鮮博覧会の二つである。いずれも施政・記念という修飾語が付く植民地統治を宣伝する意図を鮮明に打ち出す企画である。「民」主導の行事は、朝鮮農会や朝鮮畜産協会などの殖産復興団体の組織をはじめ、朝鮮新報社・京城新聞社などのメディア機関などによって開催された。開催地は、当初日本人居留地が中心だったが、それらが次第に都市化・産業化・近代化などが進行していった。そのような中で、各都市の特産品の産業化を促す品評会・共進会などの殖産と関連するテーマの行事が多く行われるようになった。都市の中でも商業・貿易・物流を中心とする商業都市を中心に展開している。しかし、日本によるアジア植民地に対する植民地政策の変化とともに工業品や織物、産業代用品などの新しいテーマが登場し、戦時色が濃くなるにつれて博覧会事業も次第に朝鮮の兵站基地としての役割や内鮮一体を具現する記念行事の性格へと変貌していった。

## 2. 京城における博覧会の展開と空間形成

### 京城博覧会の開催

朝鮮初の日韓博覧会が釜山で開かれたその翌年（1907）、京城で初の京城博覧会が開かれた。当博覧会の開催趣旨としては居留地開発の促進、一般知識の進歩向上、日韓両民の融和親睦、等々の項目があげられていた<sup>19)</sup>。統監部が発起し、韓国政府の農商工部大臣宋秉畯<sup>ソンビョンジョン</sup>率先周旋に当り日韓官民が一致して開催に至った。当博覧会を推進した中心メンバーとしては、会長を統監部総務長官の鶴原定吉、副会長を漢城府尹張憲植と統監部理事官の三浦彌五郎に評議員として、日本居留民団長、京城商業会議所会頭、日本居留民団議長、第一銀行韓国総支店支配人、漢城商業会議所議長、漢城共同倉庫会社社長、天一銀行長、東洋用達会社社長等々の当時の日韓官民の有力者で構成されていた。その資本金（博覧会開催の経費）として総額52,500円を計上し、内25,000円を韓国政府より、2万円を統監府が補助し、残額7,500円を有志者の寄付金並博覧会収入を以って補うこととし、会場は当時の大東倶楽部としていた。出品物の内訳は以下である。

第一部、農業、園芸、林業、水産、採鉱、及地金等。

第二部、化学製品、醸造品、製造飲食品、陶磁器、七寶品、瑠璃品、玻璃品、塗物、紙及紙製品、毛皮、製皮品等。

第三部、糸及綿類、染物、織物、繡物、編物、組物類等。

第四部、金属製品、武具、装身具、携帯具、家宅用具、室内飾具、文房具、遊戯具等

第五部、絵画、彫塑、美術、工芸品、楽器、写真、印刷物等。

展示物の主流は、第二部、第三部、第四部の日本からの輸入工産品と、第一部、第二部、第五部の一部をなしている朝鮮の特産品だった。なお、すでに見たように、釜山の日韓博覧会の際には協賛会設立趣意が建議されていた。興味深いことに、当博覧会も同じように会場の設備を設けるなど資金が不足したため、地域の有志らと相談し、博覧会後援機関として、日韓博覧会協賛会組織を新たに設けている。そのメンバーは、日韓連合博覧会協賛会長に日本居留民団長の熊谷頼太郎、同副会長に漢城商業会議長の洪肯燮、同幹事に日本居留民団助役の仁科正風、日本商業会議所書記長の戸叶薫雄などである。

日本人居留民による商業活動が活発になり、商業会社や近代的金融機関が制度化し資本が流れこむことによって、既に各都市（居留地）に民族的出自別に商業会議組織が設けられていた。これらの経済団体は内地日本の経済組織とも連合し、後の朝鮮で開かれる博覧会事業にも深いかわりを持つ。たとえば、1910年に日韓併合と同時に内鮮（日韓）商業会議所の連合大会が京城の京城会議所で開催される。この際、東京から東京商業会議頭中野武管が参席し会を主宰した。決議議題の中で第三号案に「朝鮮勸業博覧会ヲ京城ニ開催スルコトヲ其の筋へ建議の件」<sup>20)</sup>が含まれ、植民地朝鮮における博覧会事業の流れを窺える。

### 漢城から京城へ——南北の対比

総督府は、長い間朝鮮の首都として機能してきた京城の歴史的特質と地政学的側面を、植民

地政策の施行においても有効に活用した。1910年の日韓併合とともに旧韓末の朝鮮国王高宗が国名とした「大韓帝国」を再び「朝鮮」に改めた。同時に併合以前の首都の名称であった漢城も統監部設置を期に京城に改められた。「漢城」から「京城」への改称は、日本の「京都」や「東京」などの都を表す名称としての関連を考慮した上での改称であった。それによって、京城は日本の一都市（植民地都市）として位置つけられる。

京城（現在のソウル）は李王朝建設の当初から併合直前の旧大韓帝国まで政治・行政・経済・国際外交の空間で韓国の首都として機能してきた。李王朝建設当初の名称は、漢陽（都）で、その空間建設は陰陽五行と風水地理という論理に基づき、王宮の敷地を中心に城壁で囲んで作り上げた計画された城郭都市である。図1に見られるように、城を囲む壁には東西南北に大門と小門を設け、城壁を中心に中と外（内城／外城）の境界を作ったのである。祖宗山である北漢山（三角山）、主山である白岳山（北岳山）を基点に「左青龍・右白虎」の原則に基づいて都城を築造する。その城を一回りしながら案山である南山とつながる形で都城の規模を定める。右の流れで北岳山→駱駝山→南山→仁旺山につながる。次に主山を背景に主な宮殿である景福宮を配置し、次に左祖右社の原則に基づいて景福宮の西南部には、社稷を、昌徳宮には宗廟を

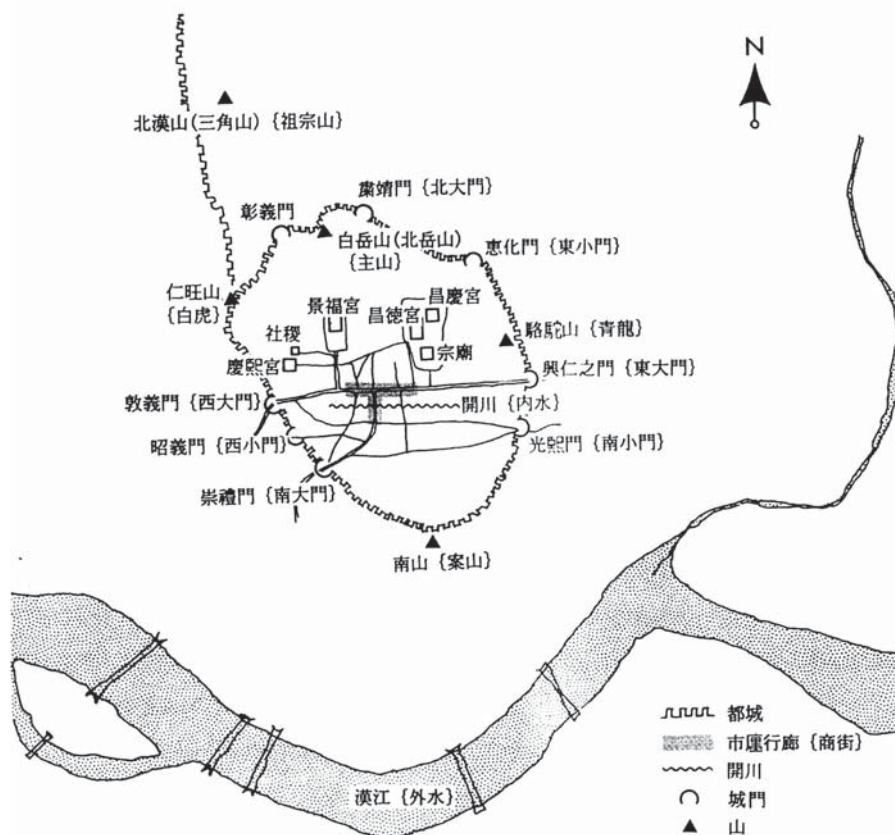


図1 朝鮮時代ソウルの空間構造

出典：ベ ヒョンミ 「朝鮮後期の復原図作成を通じたソウル都市の原型再発見に関する研究」『ソウル学研究』（ソウル学研究所）5号（1995年）：287頁。

設けた。城の東西に流れる開川は（清溪川）は内水として、漢江は外水としての役割を担う。街路の配置は、円形の城内の凡そ中間時点で東西の線を引き、それを中心街路にした。その街路と城郭が合うところに東西の大門を設け、南側の案山の脈と白虎の脈がつながるところに大門を設け南大門とした。南大門から東西に主幹線を引き、景福宮と昌徳宮からも東西の主幹線とつながる街路を造り、この造型が京城（ソウル）の大計として現在まで引き継がれている<sup>21)</sup>。そして行政的には、管轄エリアは5部で編成され、中部を除いた4部はすべて城の中地域（城内）と、城の外地域（城底十里）で分けられていた。これで城内が中心地域で、城外区域は周辺地域に該当していた。

京城に外国人が常住し始めたのは1885年以後である。日本人が居住し始めたのは、統監部(1906年)設置以前からであり、日露戦争後、漢城・仁川の物資の不足を埋めるため多くの日本人商人が仁川に渡航していた。その多くは併合後京城に移住し、主に商業活動に従事する。日本人居留民の当初の居留地は南山一帯の泥岬（ジンコゲ）を中心に形成され、当時の京城には租界・居留地という一定の地域範囲が区画されていなかったため、原則的に朝鮮人との雑居の形態をとっていた。1887年には彼らを中心とする泥岬商業会議所が設立された<sup>22)</sup>。その後、総督府による貨幣整理事業（1905年～09年）や銀行などの近代銀融機関の商業貸出、街路の整備、近代的交通整備基盤を基に日本人居留民たちの商業活動は益々活発化していた<sup>23)</sup>。ちなみに、日韓併合当時（1910）の京城の人口は、約27万人で、そのうち日本人は45,100名ほどで約17%を占めていた（ほか、中国人が1,828人、欧米人は305人ほどであった）<sup>24)</sup>が、彼らが次第に京城の空間を主導的に編成していく存在となる。

京城の都市空間が古い王朝の佇まいから植民地都市の空間として編成されていく時期は、1906年の統監府設置後から1910年の併合にいたる時期である。それらは主として日本人居留地の泥岬を中心に展開された。道路と街路の整備、交通機関が開通され、近代的建築物の建立などによって京城の植民地空間はしだいに近代化していったのである。これについて、時系列に沿いながら下段で具体的に説明したい。

はじめに、日清戦争・日露戦争後、牛馬車が登場し近代的な道路政策が始まった。1895年忠武路が造成し、忠武路1-2街に日本人の居住地が形成された。1895年から96年にかけて塔骨公園が造成され、1896年には既存の大路の幅（70-80尺）を55尺にし、余地を10年時限部条件で仮家基地を官許した（街路令、1896年）。また、近距離交通網として1899年には西大門-清涼里間に路面電車が開通した。そして、その後1899年から1901の間にかけて、鐘路-南大門-龍山間まで延線された。この当時は王宮を囲む城壁はそのままにして城門の中に電車が通っていたが、後に電車を右折させるようになった。1900年に龍山の泥岬一帯の日本人商店街には、いち早く電灯が掲げられ朝鮮人の住居地との風景の差を広げていた。朝鮮銀行や京城郵便局、京城商工会議所等々の最初の洋風の近代的建物が並び立ち、同年、鐘路交差点の3箇所に電灯を据え付けた。1899年には、遠距離交通機関として京城と仁川を結ぶ京仁鉄道が開通した。1901年南大門路（忠武路-南大門）、西大門周辺（鐘路4街-東大門）、ソウル駅周辺が繁華街となった。1903年忠武路2-5街までの街路拡張改修工事が始まり、それは1904年に完成した。1905年には京城商業会議所が創立された。その後、1906年京城公園（現在の南山）を指定。1904年には京城と釜山をつなぐ京釜鉄道が開通した。1907年には、南大門周辺に道路が新設拡





図2 1920年代の賑やかな忠武路入口、左の建物は京城郵便局  
出典：チェソククロ『写真に見る近代韓国』(上) (ソムン堂, 2005年), 20頁。

張されると同時に城門左右の城壁が撤去された。これによって、城を囲んでいた城壁の撤去が始まった。その後、光化門前一带に広い光化門通の新作路が作られた。さらに南大門まで続く太平路の広い新作路ができ、南大門からソウル駅までつながっていく。徳壽宮の向かいに京城府庁舎が建てられ、南大門一带が商業地として繁華街になった。

京城が植民地都市として編成されていた1910年代の都市空間構造を特徴つける最も重要なことは、民族別居住空間の分離 (segregation) があげられる<sup>25)</sup>。清溪川から乙支路の間がその境界で、南部は日本人、北部は朝鮮人優勢の地域で形成されている空間構造である。南村の中心は、泥岬（現在の忠武路）一带（当時の町名では明治町、永楽町、若草町、之出町、壽町、櫻井町などを含む）、明洞から泥岬洞までの退溪路南側（当時の町名では、南山町、旭町、倭城臺町、大和町、新町などを含む）であり、この一带は居住率として日本人が90%を占めていた。一方、清溪川より北の地域は朝鮮人が絶対的優勢で特に鐘路通北部はほとんど朝鮮人で占めていた。そしてこれら二つの境界を中心に、貧乏でみすばらしい北村と豊かで整理されている南村が対比をなしていた。当時の雑誌などにはこのような民族別居住空間の差異を風刺した文章がしばしば取り上げられていた<sup>26)</sup>。

### 3. 朝鮮博覧会と京城の再編

#### 王宮のカーニヴァル化

1910年代の京城が植民地都市の空間として編成されていく中で、植民地施政5年を記念して朝鮮総督府主催の朝鮮物産共進会が開催される。この博覧会の最も注目されるべき点は、旧朝鮮王宮を会場にしたことである。京城は朝鮮で開かれた博覧会の中でも開催回数が一番多い都市である。しかし、最初に王宮を敷地として使い始めたのは、植民地施政5年を記念して朝鮮総督府主催の朝鮮物産共進会である。以後、旧朝鮮王宮を会場にして開かれるイベントは6回

を上回る。だが総督府をはじめ、博覧会主催側は博覧会の敷地としてなぜ「王宮」を好んだのであろう。朝鮮王宮が博覧会事業などの公衆の場として用いられたその政治性に関しては、「新旧の対比」, 「朝鮮の歴史と伝統との決別を意味し, また, 近代との接触であった」との指摘がなされている<sup>27)</sup>。

ところで朝鮮王宮の敷地は併合間もなく総督府によって遊園地・美術館・植物園などの文化・娯楽施設が設けられ, 次第に一般公衆に公開され「聖域」から「公共の場」に変換されていた。たとえば, 1907年には, 動物園・植物園, 博物館創建立提起がなされ, 1908年には, 博物館設立が推進された。同年下半期に動物園の一部が完成し, 飼育が始まる。そして1909年には, 動物園・植物園が完工され, 開園式とともに一般公開が始まった。続いて, 1910年には博物館が落成し開館式が行われ, その翌年には博物館本館も完成した<sup>28)</sup>。これらの施設は, 後の日本人向けの朝鮮観光ガイドブックなどに記され, 朝鮮の名所として知れるようになっていった。朝鮮王宮は, 一般公衆がこれらの施設を訪れ, そこで展示された朝鮮の歴史に触れることによって国民としてのアイデンティティを確立していく教育と体験を行う国民教育の場(公共の空間)へと変容していったのである<sup>29)</sup>。さらに王宮を会場として開かれる博覧会イベントは伝統的権威の破壊と新しい文物の蘇生を表象していたといえるだろう。旧朝鮮王宮におけるこのような空間的変容は, 暗黙のうちに朝鮮人に国王への畏敬心と尊敬の意を薄らげる方向へと導かれ, やがては植民地空間を最も象徴する空間として位置付けられていく。ともかく, 1915年の施政5年を記念して開かれた朝鮮物産共進会は後の1929年に開かれる朝鮮博覧会の予行演習というべき縮小版であった<sup>30)</sup>。

しかし, 上述したように, この朝鮮物産共進会が開かれていた京城の空間は, 清溪川から乙支路の間を境に南北に分かれ, 支配者と被支配者の民族別居住空間の分離(segregation)という特徴をもっていた。この問題は, 植民地の中枢都市としての京城が後の植民地政策を展開していく中で解決しなければならない大きな課題でもあった。

### 民族別対比から民族間融合の空間へ

総督府は, 1920年代に入ると京城の都市空間が持っていた民族別居住空間の分離を和らげるための都市計画を展開する。この計画は後の朝鮮博覧会(1929)の開催に至るまで更なる空間編成を進めていく。その内実には, 京城の空間的特長である民族別居住空間の分離(segregation)から異民族間統合(integration)の空間への再編である。その大きな理由としては, 広く知られている1919年に起きた朝鮮人による独立を求める万歳運動(蜂起)をあげられる。1920年代の京城は, 植民地朝鮮の商業・経済の中心地, 軍事, 貿易, 中央政権の支部等々の役割が与えられていた。さらに1920年代には近代的な商業会社が京城, 仁川, 釜山などで発達していく中で, 次第に商業資本が京城に集中していき他の地域との格差が激しくなった。そのため京城は植民地の中枢都市としての位置づけとその役割の重要性が増すことになる。以上の事柄から, 1920年代の朝鮮は日本の一地方として朝鮮人の日本への同化が求められたために, 民族間で居住空間が分離していた京城の空間を統合する必要があった。総督府は南北の対比(格差)を融和するために, 従来の日本人居留地を中心とした開発だけではなく, 王宮周辺を中心とした空間改造も進めた。そのため都心部の街路網が漸次王宮周辺を中心に整備されていった。新作路は光

化門前一带辺りを中心に直線格子型構造に整備し南村から北の光化門辺りまで貫通できる縦の軸が形成された。続いて東西の街路が整備され、東西南北に直線化した格子型道路網を設けたのである。

ところで、この時期の京城（朝鮮）では、日本文化をはじめ当時のヨーロッパからの新文物が広まっていた。それは映画・演劇などの文化活動だけではなく、朝鮮人の生活全般に及ぶものだった。そのため、新しい生活を求めて「文化」の接頭語が付くさまざまなものが流行る。この文化という概念（用語）は当時モダンという用語とともに特に若い世代を中心に弄ばれた（モダンボーイ・モダンガールの登場）。そして、道路網の改変とともに、京城の市街地の外見と住宅問題が浮上していた。「文化住宅」が登場し、それは京城の空間でモダンの生活のための住まいとして奨励された。

以上のような動きの中で植民地統治のための新しい施設や設備を整備し、京城の空間は市区改正による近代的外観を整える。なにより重要な再編は、総督府庁舎の建立と南山の神社の設置に代表される日本の国体の移植である。神社の場合京城の南山に1919年から1925年にかけて朝鮮神宮が造営され、1925年10月15日に鎮座祭（竣工式）が行われた。並んで景福宮の前には1916年から26年にかけて朝鮮総督府が建てられた。東洋で最大・最高・最美の建物と称賛されたこの総督府庁舎は、1926年10月1日に竣工式が行われた。この二つの建物の建立によって、植民地都市京城で日本の国体が整備されたといえるだろう。二つの建物は京城の空間の中心部を南と北でつなげることで京城の空間を完全に支配下に治めることになる。それによって、民族別居住空間の分離（segregation）から民族間融和（integration）の空間へと京城は再編



図3 南山から眺めた京城府の中心街路  
 出典：朝鮮総督府『朝鮮博覧会記念写真帖』（便利堂、1932年）、1頁。



され、京城の空間的問題は解決にむかった。旧朝鮮王宮に建立された新総督府庁舎は武官の総督による新しい（文化）治世の象徴とも言えその意味でも京城の空間は統合されていった。これらの再編が行われた後、1929年に朝鮮王宮を会場にした施政20周年を記念する朝鮮博覧会が開催される。この記念行事の政治性は開催に至るまでの以上のような空間の再編によって表象されるといえるだろう。

しかし、朝鮮博覧会は1915年に施政5周年を記念して開かれた朝鮮物産共進会のスタイルを採用しながらもさらなる演出がなされていた。博覧会会場として王宮という敷地がもつ政治性は、朝鮮総督府の建立によって新たな政治性をもたらすことになった。1915年の朝鮮物産共進会の性格が新旧の対比を強調することであったというならば、1929年の朝鮮博覧会は京城の空間におけるさまざまな対比や民族間の空間的分離と葛藤を、異文化混在の空間へとさらなる再編を行うことで、やがてはそれらが融合しあう空間としての演出を目指したものだといえる。

### むすびにかえて

本稿では植民地朝鮮における博覧会事業がだれによって、どのように展開されたかを居留地の形成と日本人居留民たちの商業活動の中で探ってみた。その結果、居留地の形成と日本人居留民たちの積極的な商業活動に伴い居留地の都市化・産業化・近代化の側面と結びついて博覧会事業が推進された側面を垣間見ることができた。さらに、京城が植民地の中枢都市として編成されていく中で、王宮を会場とする政治性について探ってみた。植民地朝鮮で展開された博覧会事業の内実が19世紀半ばに始まった欧米の植民地博覧会というテキストの学習と実験（実践）であった事実は拭い去ることはできないのである。

しかし、今回の考察では、問題提起として取り上げている課題を十分に検証できたとはいえない。パビリオンの構成と「朝鮮色」の演出問題、展示物の内容、当博覧会の開催に際して京城の空間全体へと広がるさまざまな演出、朝鮮旅行ブームとツーリズムに伴う消費文化などについては本稿では割愛している。なかでも博覧会事業を推進する主要人物の中で朝鮮人メンバーや関わる経済団体との関連なども今後の課題とせざるをえない。だが、この作業を通じて戦後の歴史の中で埋もれていた朝鮮という植民地への使命感に満ちていた多くの先駆者に出会えたことは、今後の研究における楽しみであり、さらなる出会いを期待する。

### 注

- 1) 1931年5月6日から11月15日まで開かれた「パリ万国植民地博覧会」では、当時フランス帝国が支配する植民地の人々や手工芸品や農産物や芸術品が展示された。この博覧会の目的は、植民地と西欧が一体となって植民地世界の秩序を継承していく政策を啓蒙することであり、また、人々に植民地政策がいかに建設的で有益であることを啓蒙することでもあった。Patricia A. Morton, *Hybrid Modernities: Architecture and Representation at the 1931 Colonial Exposition, Paris* (Cambridge: MIT Press, 2000); 邦訳: パトリシア・モルトン『パリ植民地博覧会: オリエンタリズムの欲望と表象』長谷川章訳 (ブリュッケ, 2002年)。
- 2) 李泰文「1915年〈朝鮮物産共進会〉の構成と内容」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』(慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会) 30号(2003年): 25 - 61頁; 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』(風



- 響社, 2008年)。また、韓国語の論考として金英那「博覧会という展示空間：1893年シカゴ万国博覧会と朝鮮館展示」『西洋美術史学会論文集』（西洋美術史学会）第13集（2000年）：75 - 104頁；崔公鎬「韓国近代工芸史研究：制度と理念」（弘益大学校大学院博士学位請求論文, 2000年）；全致貞「日帝時代の朝鮮博覧会（1929）研究」（成均館大学校大学院修士論文, 2003年）；崔錫榮『韓国博物館100の歴史』（民族院, 2008年）などの論考がある。
- 3) 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』（風響社, 2008年）では、日本国内で開かれた博覧会事業と台湾・朝鮮・満州のアジアの植民地を取り上げ、日本人による都合のいい異民族の表象が日本帝国の内外で行われてきたことが指摘されている。しかし、分析対象の取捨選択の範囲、先行研究や理論的課題の総論に関する明確な提示がなされていないこと、また日本国内をはじめ台湾・朝鮮・満州を中心に挙げたものの、それらの異なる空間的側面でのまなごしが欠如していることから、著者の主張したい西欧諸国（「植民地博覧会」というテキスト）との相違点に関する詳細が不明である。
- 4) 植民地近代性 (colonial modernity) という概念は、植民地の社会を多様な視点で捉えようとする試みである。従来の植民地研究の主な関心事であった民族（主義）のほかに地域、階級性、芸術、統治体制、などにも目を配る。韓国国内でこの論議が活発になったのは、アメリカで植民地期の韓国を取り上げた *Colonial Modernity in Korea* (1999) が韓国語に翻訳され国内の研究者たちに刺激を与えたからである。アメリカの主流の韓国学研究者たちによって執筆されたこの文献は、植民地近代性の問題を本格的に取り上げた点で、韓国学研究に刺激を与えた。なかでもこの文献では、植民地主義が韓国の近代性形成に介入するが、その事実によって韓国人が自動的に近代性を受け入れる単純で消極的な受容者としての存在ではなかったことを明かしている。このような観点は、いわゆる「内在的發展論と植民地近代化論」をこえるための試みであって、その後、植民地支配の過程で形成され構造化された政治的、経済的制度と統治の行為、建築、芸術、生活様式、等々の多様な分野で用いられるようになった。Gi-Wook Shin and Michael Robinson, eds., *Colonial Modernity in Korea* (Cambridge: Harvard University Press, 1999) 韓国語訳：Do Myoun-hoi『韓国の植民地近代性』（サムイン, 2006年）。なお、日本の植民地研究に関する戦後の日韓における研究の歩みに関しては、次の論文で総括的な分析がなされている。三ツ井崇「朝鮮」日本植民地研究会編、『日本植民地研究の現状と課題』（アテネ社, 2008年）第3章, 91 - 119頁。
- 5) 『大韓毎日新報』1906年5月18日。
- 6) 『韓国近代史資料叢書』2巻, 第16『釜山編』（国学資料院, 1999年）, 894頁。
- 7) 「釜山を開港すること。今後20ヶ月以内に他の二港を開港すること。それらの港では〈地面ヲ賃借シ家屋ヲ造営シ、又ハ所在朝鮮人民ノ居宅ヲ賃借スルモ各其随意ニ任ス〉こと。日本国民、朝鮮国指定ノ各口（港）ニ在留中、若シ罪科ヲ犯シ朝鮮国人民ニ交渉スル事件ハ、総テ日本国官員ノ審断ニ帰ス」こと。高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波新書, 2002年）, 2 - 3頁。
- 8) 坂本悠一・木村健二『近代植民地都市釜山』（桜井書店, 2007年）, 27頁。
- 9) 「博覧会開催の旨意を體し其の旨意と其設備とを内外に紹介し來觀心を誘導する為に能ふ限りの方法を以て其の盛況を鼓吹すると共に來觀者の間に介在して諸般の付帶事業を經營し以て後援者となり案内者となり此博覧会の成功を大多ならしむるにあり」と、その設立目的を知らしめていた。「協賛會趣意書」『朝鮮之実業』（朝鮮実業協会）11号（1906年4月）：28 - 29頁。
- 10) この初の日韓博覧会は、その開催と運営に関わる協賛会の組織、展示品の内容、展示仕組、等々の経験が後の朝鮮で展開する博覧会事業の基盤をなしていたことは注目に値する。
- 11) 高崎, 2 - 3頁。
- 12) 高崎, 4 - 7頁。
- 13) 「日本人商店の創始状態」京城府『京城府史』第2巻（朝鮮印刷株式会社, 1930年）, 589頁。
- 14) 寺内総督「総督府の開設」元師寺内伯爵伝記編纂所『元師寺内伯爵伝』（1920年）, 667頁。
- 15) 林美貞「植民地朝鮮の工芸と日本：〈産業政策〉と〈アジア古代文明〉への試み」稲賀繁美編『伝統

- 工芸再考, 京のうちそと: 過去発掘・現状分析・将来展望』(思文閣出版, 2007年), 385頁。
- 16) 同上, 385-388頁。
- 17) 李王職美術品製作所は, 当時ソウル太平通一丁目にあった王室御用の工芸品制作施設であった。1908年に李王家宮内府が統監府の傘下機関として編制されると「漢城美術品製作所」(1908-10)として出発し, その後, 「李王職美術品製作所」(1911-22), 「株式会社朝鮮美術品製作所」(1922-37)として変貌をとげる。同上。
- 18) 植民地期の間には殖産をテーマにした博覧会だけではなく, 様々なテーマ——家庭・婦人・子供・衛星, 等々——の展示イベントも各地で行われていた。
- 19) 「韓国諸政の指導改善漸く其の緒に就かんとする折柄, 博覧会を開催するは独り居留地開発の一刺激たるのみならず, 一般知識の進歩向上と日韓両民の融和親睦上喫緊の事業なるが故に, 京城に日韓連合の博覧会を開催すべしとの輿論起り, 当時庶政多忙の統監府は自ら之を発起し, 韓国政府と協商の結果農商工部大臣宋秉峻率先周旋の勞に当り, 度支部も亦之に賛同を表し, 茲に日韓官民一致し五月より準備に着手し九月十五日より十一月十五日に至る二ヶ月間之を開設することとし, その名称を京城博覧会とした」(「京城博覧会の開催」京城府『京城府史』第2巻(1930年), 586頁)。
- 20) 「京城商工会議所25年史」『韓国近代史資料叢書』1(国学資料院, 1999年), 134頁。
- 21) ベヒョンミ「朝鮮後期の復原図作成を通じたソウル都市の原型再発見に関する研究」『ソウル学研究』(ソウル学研究所)5号(1995年):277-329頁。ソウルに都を設ける経緯とその物語に関しては次の文献で詳細を確認できる。川村湊『ソウル都市物語』(平凡社新書, 2000年)。
- 22) 民族別に設けられていた商業会議所は, やがて1915年になると商業会議所施行規則発令によって統合される。Park Seon-Heui「京城商業空間の植民地近代性: 商業会社を中心に」『大韓地理学会誌』41巻3号(2006年)301-318頁。
- 23) 民族別空間の変化は, 人口の推移においても確然であった。併合の後, 朝鮮移住日本人はそのほとんどが都市(居留地)を中心に居住していた。中でも京城が一番多く1920年代から30年代にかけて朝鮮居住日本人数の51%程度が都市化していく14の府に居住していて, そのうち40%が京城に集中していた。金ヨンゴン「植民地期京城の社会空間構造の変化と都市経験(Changes in Social and Spatial Structure and Urban Experience in Keijo Area during the Japanese Colonization)」『ソウル学研究』(ソウル学研究所)20号(2003年):139-180頁。
- 24) 孫禎陸「ソウル600年の足跡」『ソウル学研究』(ソウル学研究所)4号(1995年):45頁。
- 25) さらにそれに付随して現れる都市空間の中心一周辺の二重構造の形成も重要な変化の一つであった。1910年には京城が植民地都市転落するにつれて, 政治と行政業務に携わっていた多くの朝鮮人が京城で生活の根拠を失い, 京城から離れていた。反面, 1910年代に農村で生活の基盤を失った人々が京城に移住し, 都市の下層民として定着する。孫禎陸「ソウル600年の足跡」『ソウル学研究』(ソウル学研究所)4号(1995年):37-78頁。
- 26) それらは, 植民地都市京城の風景として, また植民地空間をいきる原住民の悲哀として描かれる。
- 27) 李泰文「1915年〈朝鮮物産共進会〉の構成と内容」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』(慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会)30号(2003年):25-61頁。
- 28) 一般には, 「動物園」「植物園」「博物館」をあわせて「昌慶苑」と呼んでいた。
- 29) 林美貞「韓国国立中央博物館所蔵: 元李王家美術館の近代日本美術コレクション」『視る』(京都国立近代美術館)406号(2003年5月):2-5頁。
- 30) 朝鮮博覧会の開催の趣旨と目的は, 「朝鮮博覧会記念写真帖」の序文で確認できる。朝鮮総督府「朝鮮博覧会記念写真帖」(1930年)序。